昼の施設

外観：地域の人たちの生活に溶け込む建物

夜の施設

外観：地域の人たちのワクワクを叶える建物

～1.5人称の距離を実現する～

開放型複合福祉施設わたバ

「1.5人称」とは、一人の人として1人称の自分を大切にしつつ、2人称としての相手にも寄り添える、つまり1人称と2人称の間を行ったり来たりできるイメージを共有する姿勢。保育士と園児、介護士と利用者、子ども・おとな・高齢者などの立場や世代の「すべき役割」「あるべき姿」から少し離れ、それぞれのちょうどいい距離感を実現するために、地域に開かれた多用途に利用できる施設を造る。敷地内に35m、最大幅4mの長いアプローチを設置。落葉樹によってできる木陰には休憩スペース、アプローチに沿って商店街のように地域交流室、カフェとパン屋の入口が並び、店舗を横目に散歩することも気軽に立ち寄ることもできる。認可保育所、認知症対応型デイサービスから建物の外を通らずに、地域交流室に行き来できる動線を確保し、地域交流室は地域の人にも広く開放。それぞれの実践が自然に交差し混じり合い、新たなカタチを生み出していく。

アプローチ：焼きたてパンの香りのする35mのアプローチは、それぞれの好奇心をくすぐる

みんなの広場：だれもが自由に入れる菜園とウッドテラスは心地よい距離感を生む

みんなの広場：地域の人たちと季節ごとに様々なイベントを開催

相談室：車いすでスムーズに入れる相談室

カフェ：障害者の働くカフェは地域住民の交流場

パン工房：障害者の働くパン工房は、子どもたちの体験の場

地域交流室：子ども食堂や学習支援を通して広がるコミュニケーション

はぐくむ　はたらく　かさねる

育む 働く 重ねる

～立場や世代を超えてつむぐ明日のカタチ～

一人ひとりの「そのまんま」に合った距離感を実現できる空間で、つむぎ出される人と人との関わり。支えているようで支えられている「おたがいさん」が日常に溢れ、時間をかけて、広がっていく居場所。「みんなが育むつながりのまち摂津」に佇む寄り道のような空間。

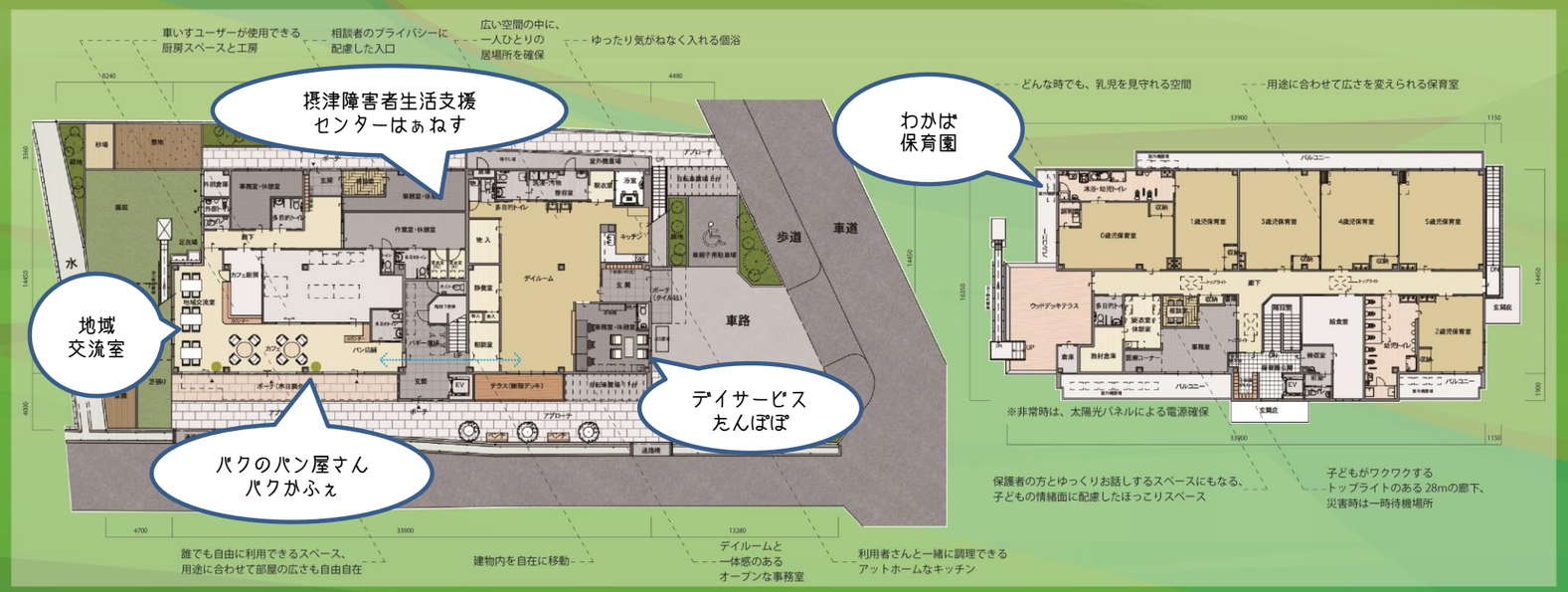
庭：土・砂・泥を、子どもたちの五感を育む

「わたバ」のこれまで

1964年　「子どもが生まれても働き続けたい」と願うお母さんたちの手でつくられた『共同保育所』

2003年　「もっと利用者に寄り添った介護をしたい」と願うホームヘルパーの人たちの手でつくられた『ケアセンターたんぽぽ』

2003年　「だれもが地域であたりまえに生きる街を」と願う障害当事者・親・地域の人たちの手でつくられた『光摂会』
それぞれの想いを大切に地域での実践を続けていく中で、地域の人が取り持つ縁をきっかけとして異なる法人が集い

2014年　「世代や立場を超えてともに生きていく場づくり」を目指して、認可保育所『わかば保育園』、認知症対応型『デイサービスたんぽぽ』、障害者が働く『バクかふぇ』をひとつの場所に開設。

2024年　ひとつの法人となって地域に開かれた新しい福祉を実現します。